



館長だより

山形県産業科学館

令和6年12月19日(木)

発行 館長 加藤智一

霞城公園 最上義光像

昨日、年配のご婦人（シャキッ!としていてスタスタ歩かれる、すがすがしい印象の方でした）が来館され、「最上義光について知りたい。」とのことでした。歴史の話だったら困るなど思いながらお話を伺ってみると、この方、霞城公園のガイドボランティアをされているということで、東大手門にある最上義光像についてお知りになりたいとのことでした。たまたま先代館長の引き継ぎ資料の中に、最上義光像製作に係るファイルがありましたので、読んでいて良かった!! せっかくのチャンスですので、改めて当時（建立から一年後の昭和53年11月17日）の山形新聞を見てみることにしましょう。

『霞城公園の最上義光像は、戦国の世にめげず、山形市の産業の発展の基礎を築いた山形城主最上義光の功績をたたえ、最上義光公顕彰会（鈴木傳六会長）が、昭和52年11月、榊西村工場（同市銅町）に依頼し、1年半がかりで製作したブロンズ像です。高さ3.5m、指揮棒の先端から馬のしっぽの先までが6m、幅が1.5m、像の重さが3t、台座が2tあります。この騎馬武者像の大きな特徴は、二本足で立っているということ。当時世界中を探しても、二本足で立っている騎馬像はなく、もし立てることができても、ブロンズはもろく、地震や風に耐えられないと言われていました。そこで考えられたのが、ブロンズ像の内側が空洞になっていることを利用して、台座と二本足、像を結ぶ鉄柱を入れ、さらに像の中心に重心を置くようバランスをとり、ヤジロベエの原理で動いても元に戻るようにすることでした。昭和53年6月の宮城県沖地震の際には、この像を見守っていた公園関係者が「ちょうど馬が走っているように動いた」と証言しており、当時の技術力の高さに驚かされます。』

と、ザックリこのようなことが書いてありました。山形県産業科学館には、山形鋳物が、伝統工芸品の生産だけでなく、自動車部品など、工業製品として幅広く進化を遂げている様子が分かる展示がされています。どうぞ一度お越しになり、ご覧いただければ幸いです。

さて、話は戻りまして、冒頭のご婦人。ハキハキとした受け答えで要領よく質問されていたので、会話している私も気持ちよく対応できました。私も、

10年後20年後、死ぬまで、前向きで、シャキッとした後期高齢者で在れたらいいなと思った次第です。

